町史とっておきの話 248

只見野鳥雑記 ⑤

日本野鳥の会会員
新国 勇

クマゲラ▶

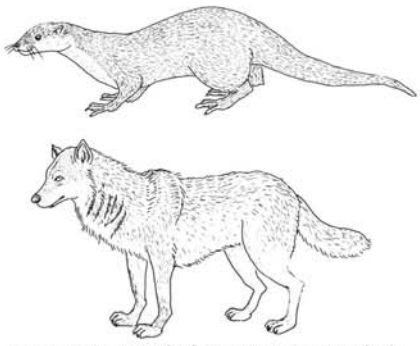
只見町にもいた希少動物

「クロッケラっちゅう鳥は、おらが狩猟免許を取った昭和十八年ぐれぇまでは見らっちゃが、それがらはいなぐなっちまった」

布沢の菅家栄市さん(明治四十年生、故人)からこの話を聞いたときはびっくりしました。クロッケラとはクマゲラのことです。カラスほどもある日本最大のキツツキで、北海道と青森県・秋田県の一部の地域でしか生息していない絶滅危惧種。本州最南端での確認地は、岩手県の須川岳です。それが只見町にもいたというからおどろきです。

一九八八年以降、檜枝岐村の大津岐川、昭和村の矢ノ原湿原や博士山、下郷町の南倉沢などでクマゲラの目撃例や食痕、鳴き声の確認例が相次ぎました。そこで一九八九年十一月三日、日本野鳥の会福島県支部が調査隊を組み、檜枝岐村内の林道を探索しましたが発見できませんでした。只見町でも布沢と蒲生の山中で、クマゲラがつついた痕と思われるブナの木が見つかり、森林総合研究所東北支所の由井正敏さんが一九九〇年十一月八日、調査に来町されたことがあります。「大陸では若鳥が五〇〇キロも移動した記録があり、只見に飛んできてもおかしくはない」と由井さんは話されましたが、クマゲラと断定することはできませんでした。これ以降も数度のクマゲラ探索は行われましたが、発見したという情報はいまだにありません。

クマゲラは絶滅する危険が高いとされている鳥ですが、すでに絶滅した動物が只見町にいたという事例を二つ紹介します。ニホンオオカミは一九〇五年、奈良県東吉野村で捕獲されたのを最後に確認された記録はなく、絶滅したほ乳類とされています。しかし、浅草岳の平石山の下でニホンオオカミらしき動物を入叶津の佐藤泉さん(昭和七年生、故人)がトラップで捕獲したことがあります。一九七三年ころ、泥まみれのキツネに似た獣がかかっていました。ちかくにあった木でたたき殺し、もち帰ったのですが、どうも様子がちがうので、当時剥製作りをしていた下郷中学校の先生にわたし、剥製にされました。その後、鑑定しようとしましたが、頭骨がなかったため確認できなかったようです。



▲ニホンカワウソ(上)とニホンオオカミ(下)

二例目はニホンカワウソです。四国南西部が最後の生息地でしたが、一九七九年以降、目撃例はなく絶滅したとされています。田子倉出身の皆川喜助さん(大正三年生、故人)は、一九二一年ころ、父が田子倉の小左越の鼻という岩穴のちかくでニホンカワウソを鉄砲で撃ち、毛皮は石伏の商売人に売り、肉は食べたと話されました。味は覚えていないが油っぽかったそうです。叶津字中ノ平の吉田貞夫さん(大正七年生、故人)も小学生のころ、中ノ平集落を流れる叶津川の下流、ガワッパリというところにあった足跡がニホンカワウソのものだと教えられたことがあると言っていました。さらに佐藤泉さんは、一九六〇年ころ、沼ノ平の笹沼でニホンカワウソを見たことがあるそうです。胴がながく灰色っぽかったと語っていました。話を聞いた方々は、豊富な狩猟経験から鋭い識別眼をもっていて、信頼性は高いと思います。

只見町に伝わるむかし話「猿とカオスの魚釣り」のカオスとは、ニホンカワウソのことです。「古屋のむる」というむかし話には、オオカミがでてきます。これらの絶滅動物は、ひょっとすると、むかし話に登場するほど身近な動物だったのではないでしょうか。

このほかにも、イヌワシ、クロホオヒゲコウモリ、ユビソヤナギなど数多くの絶滅危惧種が確認されている只見町は、それらの生息を可能にしている豊かで奥深い生態系をもっているともいえそうです。